

山形大学附属博物館報 16

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY 1990. 3. 1

目 次

大蔵村と稲村家資料について	(1)
大地は生きている	(2)
カモシカ考	(3)
平成元年度博物館実習提出レポートより	(4)
資料紹介	(5)
平成元年度公開講座・特別展を終えて	(6)

大蔵村と稲村家資料について

館長 横山 昭 男

博物館としての本館が他に誇ることでできる面の一つは、歴史資料の収蔵である。その収蔵資料にも、ある研究の目的で多方面から、特定問題に関連したものを収集されたものと、一地域または一個人が、かつて所有したものをすべてを譲り受けたもの、とに大別することができる。利用の立場から見た場合、前者はその資料群に一つの系統性をもつという点で便利であるが、後者は、地域や個人に限られるが、資料が特定の問題によって選択されずに、各分野にわたって残存するから、個別的な研究や新たな問題を発見する上で、とくに有意義である。

当博物館の所蔵資料で、後者に属するものの一つが、旧大蔵村の稲村家文書である。同家文書の点数は、冊子、単独文書の合計で、約1,100点にのぼるが、年代は江戸中期のはじめ、18世紀から明治時代にあたるもので、この期間の村文書および同家の私文書すべてを含んでいる。大蔵村とは江戸期の村名で、現在山形県東村山郡山辺町に属しているが、その地理的な位置は、山形盆地の西辺の断層崖にあり、白鷹丘陵の小盆地に発達した山村である。享保3年(1718)の大蔵村の戸数・人口は、64戸・350人で、この数は以後幕末までの150年間余、ほとんど変化していない。

このような山村に、18世紀から19世紀にかけて、村山地方を代表するような土豪的な豪商、稲村七郎

左衛門家が活動していた。小さな坂を登ると、小高い岡の上に今も残っている門と茅葺き屋根の大きな家屋は、その後幾度か改造されたものとみられるが、かつての繁栄をしのばせてくれる。

18世紀に、この地域を代表するような豪商が、この山村に発展したのはなぜだろうか。

まず同家の由来によれば、その先祖稲村備後は、17世紀はじめの慶長年間、庄内の烏海山麓の大蔵稲村が岡から一族16名とともに移住した。大蔵村の開発が稲村家を中心に行われたことは、同村の鎮守、烏海神社が、稲村家の氏神であることによっても知られる。この稲村家が、18世紀前半になると、米・大豆・蠶などを中心に大量の商品を、天童・長崎など各地から仲買人を通して買い集め、これを最上川を下して、酒田・上方方面に売り捌くという商業活動を行っていた。さらに18世紀後半になると、その取扱商品も、以上のもののほかに、とくに青芋・紅花が多くなってくる。これらを上へ販売するとともに、上方からは移入品である、くわたり・砂糖・塩をはじめ、紙・茶・こんぶなどを仕入れて、各地の小売商人へ卸売りするという仕組みをとっていた。

稲村家の経営は、商業活動としてはこの時期が絶頂期であるが、単に商業活動だけでなく、自家経営としても、多くの下男・下女を使って蠶の製造や農業経営も行っている。まさに農工商一体の多角的な経営が、その特徴であったのである。

大蔵は地理的だけでなく、経済的にも重要な所にあった。そこは、村山地方の山形・山辺から白鷹丘陵を越えて豊陽地方に渡る関門に当り、ま

た山形盆地と五百川峡谷の村々を結ぶ中継所ともいうべき要衝にある。五百川峡谷や左沢地方は青苔の主要産地でもあった。稲村家が豪商として発展した背景には、商品流通の中継所としての条件を見逃すことができない。商品流通が広く農村に行きわたるようになるのも18世紀半ばであった。このような時代を背景にして、はじめて稲村家のような、土豪的な豪商の活躍がみられたのである。

(教育学部 教授)

大地は生きている

大 沢 積



第1図 エベレストの地質
(中島輝光, 1985)

世界の最高峰エベレストの頂上の岩石は、結晶質の石灰岩(第1図)で海百合の化石を含んでいる。このことは、世界の最高峰もかつては海の底にあったということになる。また、エベレストは現在も隆起していて、毎年少しづつ高くなっている。何故であろうか。少し専門的になって申しわけないが、地球は厚さが20~200kmの10数枚ほどのプレート(岩板)でおおわれている。ヒマラヤ山脈は、ユーラシアプレートとインドプレートとが衝突してできたものである。衝突する前に両プレートの間にあった海の部分が衝突によって隆起し、同山脈を作ったのである。したがって、数1,000mの高度の山地に海棲の貝化石やアンモナイトなどを産するのは当然である。また、現在も上述の両プレートは押し合っており、侵食に対して隆起がまさっているのです。ヒマラヤ山脈は高くなっている。大地は生きているのである。

遠く離れた異国の話ではなく、山形県内につい

てみても、まさに大地は生きていると言える。例えば山形県北西部の草薙付近で見られる最上川峡谷は、例外的に急峻な地形をなしている。この付近の地質は約1,400~500万年前の海に堆積した泥岩からなる。地球誕生46億年の歴史から見ると、ごく若い時代の堆積物からなるので、普通ゆるい地形を示すものであるが、ここでは現在でも隆起し、上昇しているのです。急峻な山容を示している。

山形大学から東を見ると、千歳山を始めとして、多数のおわんを伏せたような形を示す山々が目立つであろう。これら山々は、約1,500万年前の海底火山である。少し専門的になるが、流紋岩—デイサイト(石英安山岩)と呼ばれる火山岩の一種である。粘性の大きな溶岩からなるので、急傾斜の側面をもっていて、溶岩円頂丘といわれている。山形盆地付近には海棲の貝化石をあちこちに産し、この海底火山が噴出した約1,500万年前は海であったことは確かである。人間の一生が数10年であるので、大地が生きていることが一生の間に確認できないが、もしも数万年~数10万年生きられるならば、子供の頃に海であったところが、老人になった時、陸地になったことがはっきりと見られるであろう。

山形県内のあちこち、特に庄内地方の山々では、枕状溶岩が見られる(第2図)。第3図に示したような多数の枕を重ねたような産状をなしている。



第2図 枕状溶岩(大沢 積ほか, 1983)



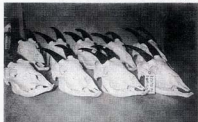
第3図 枕状溶岩の模式図
(荒牧重雄, 1979)

現在、世界各地の海洋底で玄武岩の枕状溶岩を噴出している。山形県内の庄内地方も、昔は海であったことがはっきりわかる。

(教養部 教授)
附属博物館運営委員

カモシカ者

伊藤 健 雄



県内で回収されたカモシカ頭骨標本の一部

カモシカ（標準和名はニホンカモシカ）は、現在文化財保護法によって国の特別天然記念物に指定されている。指定されたのは昭和30年2月15日。同法によれば、“特別天然記念物”とは、天然記念物のなかで世界的・国家的にみて特に価値の高いものであり、建造物や仏像などに例えれば、“国宝”に相当するものである、と規定されている。

カモシカは、また、山形県の県獣にも指定されている。これは鳥獣保護思想の啓蒙と普及をはかるために県が独自に指定したもので、同時に候補にあがったニホンザルやリスをおさえて第一位になった。カモシカを県獣に指定しているのは栃木、山梨、長野など、ほかにもいくつかの県がある。

県内では、現在でこそどこでも容易にこの動物を見ることができるが、30年ほど前までは“幻の動物”といわれ、めったにその姿を見せなかった。法による保護の強化と徹底した密猟の取締りによって、多くの地域では着実に個体数を増し、生息範囲を広げていった。わが国において、特別天然記念物に指定された動物が、短い年月のうちに著しく回復した例は、ほかにも見当たらないのではないだろうか。

しかし、集中的高密度地域の出現や分布の拡大につれて、当然のことながら農林業に対する食害

問題が起こってきた。昭和50年ごろからのことである。県内でも十年ほど前から一部の地域で騒がれだし、二、三年前からは広い地域に騒ぎが及んでいる。被害を受けた農家の人達は、激しい口調でカモシカを攻撃する。“国宝”は一転して“害獣”になり下がってしまったのか。

これらの地域で聞く声の多くは、憎っきカモシカがなぜ国宝級の扱いを受けるのかという率直な疑問であった。

その答は二つあるように思う。一つ目は、指定当時全国的にカモシカの個体数が著しく減少し、絶滅への道をたどりつつあったこと。増えたらどうするかなどと考えるゆとりのない状態まで追い詰められていた訳で、とにかく増やすことが最大の目標であった。

二つ目は、生物地理学的にみた遺存種としての価値、つまり“生きている化石”としての価値をもっていること。現在、世界のカモシカ類は、ヨーロッパアルプスのシャモア、北アメリカロッキー山脈のシロイワヤギ、モンゴル草原のサイガ、グリーンランドのジャコウウシなどのように、北半球の各地に断続的に分布し、それぞれの環境に適応して形態や生活様式を変化させている。とりわけ日本のカモシカは、アジア大陸中央部の森林に住んでいたカモシカ一族の先祖の形態と生活様式を、色濃く留めた原始形の生き残りなのである。つまり、日本列島にカモシカという動物が定住しているという分布の標相自体が天然記念物としての価値といえる。

指定から30年以上が経過し、一つ目の価値は変化した。東北地方や中部山岳地方では安定した生息域が広がってきており、とりあえず絶滅の危機は薄らいだ。しかし、二つ目の価値（これを一般に理解してもらうのは極めて難しいのだが）は、個体数の増減にかかわらずなくなることはいない。

さらにカモシカは、生物地理学や第四紀自然科学上の問題を多く抱えている。例えば体形の島嶼化やベルグランドの法則への適合の問題、社会単位や繁殖行動の進化の問題など、十分な解答はまだ出ていない。

県内では、1年間に100頭以上のカモシカの死体が発見される。“死体にもものを言わせよう”と、数年前から許可を得て出来るだけ回収に努めているが、手に入るのは一割程度に過ぎない。それでも最近では標本戸棚に収めきれなくなってきた。

大学の博物館が、研究者のこのような資料を整理・保管できるような設備と組織を備えることができれば、博物館にとっても研究者にとっても有効なものとなろう。研究室が資料で埋まってしまう前に、是非そうなって欲しいと願っている。

(教育学部 教授)
(附属博物館運営委員)

◆平成元年度博物館実習提出レポート

「実習を終えて」より

平成元年度の博物館実習を受けた学生は、人文学部39名、教育学部13名、理学部24名の合計76名。実習は二回に分け、平成元年7月17日から21日までと、8月21日から25日までのそれぞれ5日間、当館で実施された。実習5日目(最終日)に提出されたレポートから一部を抜粋して紹介してみたい。

人文学部 3年 H・M

実習の5日間は、夏の暑さとの戦いという感が強かった。しかし、毎日が新鮮で様々なことを体験できたという思いがそれ以上に強い。

当初、学芸員について、「学芸」という語の響きから、おとなしいデスクワークの仕事のように思っていたのだが、実際には肉体的に近い非常にハードな職種であることを知り意外であった。

人文学部 3年 M・T

人文学部である自分にとって、こういう形での実習はまず他では経験することができないものであり、たった5日間であったが様々な分野で標本を作成したり、拓本をとったりする実習を行うことができた貴重な経験だった。

総じてみれば、今回の実習は限られた時間の中でどれだけ丁寧に正確な作業ができるか、それを問われたような気がした。学芸員は何でもできる雑芸員でなくてはならないと講義にあったが、仕事の内容が雑ではだめであり、また学芸員たる人間が雑な人間ではつとまらないと感じられた。

教育学部 3年 K・A

今まで、博物館とは珍しいものが展示されてい

る、と漠然とした考えしか私にはなかった。ところが今回の実習で博物館は社会教育の場であり、展示には教育的配慮もなされていることを痛感した。ひとつひとつの展示物には、収集・調査等数々の作業があり、見学者がわかりやすいよう細やかな工夫がこらされている。学芸員は展示の仕事のみ行う人かと思っていたが、それだけではなく、見る人に常に確かな説明ができるよう使命感を持って、広く深く研究を続けていかなければならない。今回の実習は、学芸員となるには並々ならぬ努力が必要であることを教えてくれた。

理学部 3年 T・S

前から疑問に思っていたのだが、自然科学つまり理科の体系には物理・化学・生物・地学の4つの分野があるのに、博物館では前者の2つが扱われることが皆無に近いことです。博物館は純粋な自然を対象にするから、展示するものがないからというのはちょっと短絡的だと思うのですが、学歴・年齢等の制限のない生涯学習としての博物館を展開していくには、もっと対象分野を広げていく必要があると思う。

理学部 3年 N・A

卒業後、学芸員になるにしろ、ならないにしろ実習を通して学芸員の仕事というものを徹かながらでも知ることができたのは収穫だった。今後、博物館を見学する機会があれば、以前とは別の目で展示物そして学芸員を見ることができよう。また今回の実習によって、自分の大学の附属博物館が身近なものになったのは確実である。

ほとんどの学生が、博物館学の講義を受講する前の実習となったため、レポートの多くはそれまで頭の中で描いていた「学芸員」と、実際に学芸員の仕事の一部を実習で体験することで生まれるギャップに戸惑う内容のものが多かった。

5日間の実習内容が盛りだくさんで、学部を超えた様々な経験ができ有意義だったというレポートと、暑さの中、ひとつの実習にかける時間が少な過ぎてあわただしかったという対称的なレポートが半々だったことは、来年度の実習を計画する上で参考とすべき材料となろう。

資料紹介

山寺発見のこけら経

山形市山寺立石寺は、天台宗の名刹として、また宗派を限らず先祖供養の山として広く人々の信仰を集めている。その山寺の帝釈天堂裏のホトケ岩大窟、五輪窟、五大堂裏手の洞窟などから、木造五輪塔や千体仏などととも、2万本余にも及ぶ、こけら経（柿経）が発見されている。当窟ではその一部、33点を所蔵している。一見すると、今も死者の供養のために奉納される卒塔婆のようでもあるが、こけら経は、それよりもずっと小さく、巾1~2cm、長さ21~26cm、厚さ1~3mmほどの松や杉のへぎである。また墨書の内容は、卒塔婆は戒名であるが、こけら経は経文である。

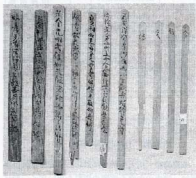
その形状は、上部が山型で、加えて左右に2本の切込を入れたものも多い。この形は、板碑などの塔の形を模したものと見られている。最初に上部を細工した板をつくり、それを薄く剥ぎとって作ったのであろう。その片面に経文の一行に相当する17文字が書かれている。なかには経文一行の頭字一字のみや五文字など、変則的なものもあるが、これは簡略化したものと思われる。経文は、法華経が最も多く、他に阿彌陀経、観無寿量経、無量寿経がある。発見された当時は、風化した凝灰岩や骨の細片の混じった土砂に半ば埋もれるような状態であったが、洞窟内にぎっしりとあり、しかも一かたまりずつグループになっているのがわかったそうである。また下の方に菰があったことから、一本17文字ずつ書いたものを経典一部にまとめ（法華経ならば約4000本になる）菰で巻いて奉納したと見られる。

こけら経は、中尊寺や松尾寺などからも発見され、中世庶民信仰資料として注目されている。最古の銘をもつものは、奈良元興寺極楽坊から出た嘉禄元年（1225）のものであるが、文献にあらわれたものによると平安末期までさかのぼることができる。ところで、こけら経は、卒塔婆経とも木簡写経とも言われ、経文を書いた木ということで「経木」とも言われる。これは、プラスチック製品に代わられ見ることが少なくなったが、包装に使われる「経木」の語源とされている。

極楽坊では天井裏などから3万本以上ものこけら経が発見されており、時代も鎌倉から室町時代に及んでいる。古いものは、ヒノキの板を一枚一枚割り剥いで作っており、20本を一組としてその両面に経文一行（17文字）ずつを書いている。室町時代後半頃からは、木片は台座で削り剥いで作られたようで、幅広で表面のなめらかな薄手のものになり、片面のみに写経されるようになる。片面写経の遺品では、奈良西大寺奥院の元禄13年（1700）の銘のものが最も新しい。山寺のものは、薄手で片面写経であるから、室町時代後半以降のものかと推定できる。

経典を写しとることは、仏教伝来以来行なわれてきたが、その目的・方法は時代によって変化している。本来は、寺院が経典の教えを正確丁寧に筆写し、仏の教えを広め、または保存するのが目的であった。が、次第に経典の内容よりも、写経し納経する行為によって生じる功德に期待することが重点となっていった。こうして前世利益や追善供養を目的とした写経事業が、平安末期は貴族に、中世になると一般庶民の間にまで広まるのである。貴族は料紙にも贅をこらしたものをを用いたが、中世庶民においては、こけら経の如く素材で実用的なものであった。こけら経は、分割書写もしやすく廉価でもあり、塔型の木片に書写するために写経の功德と同時に造塔の功德も重ねて積むこともできた。

こけら経の集積は、無名の一般庶民が何がしかの米銭を寄せ合い信仰祈願した事実を示す。中世を通して台頭してくる民衆の動きをうかがい知ることができるのである。



平成元年度
公開講座・特別展を終えて

公開講座「山と生活」

「山形」という県名がすべてを物語っているように、本県には我が国でも代表的な名山や高山が多く、それぞれの山にちなんだ独特の文化・宗教・自然が形成されている。また私達は豊富な山の資源の恩恵にも浴している。平成元年度の公開講座では、県民に欠くことのできない「山」と、我々の生活について、いろいろな角度から講じてみた。受講者の中には「山歩き」「山菜・きのことり」など「山」に親しんでいる方も多く、例年ない活発な質問が相次ぎ、好評のうち終了式をむかえることができた。

講師及び講義科目

回 月 日	講義科目	時間	官職氏名
開 講 式			
第 1 回 9月30日	講殿山の本地	120	人文学部助教授 菊地 仁
	ツキノワグマと山の生活	"	理学部教授 大津 高
第 2 回 10月7日	キノコの利用と生産	"	農学部教授 萩山 絃一
	出羽の山岳信仰	"	教育学部助教授 伊藤 清郎
第 3 回 10月14日	山村の生活と文化	"	教養部助教授 岩鼻 通明
	山の幸	"	理学部教授 安部 守
第 4 回 10月21日	山の生い立ちと地すべり	90	教養部助教授 山野井 徹
	"	"	"
終 了 式			

特別展「山と生活」

公開講座「山と生活」に対応して開催された本展は、講座の内容を実際の資料を用い広く一般に

紹介したものである。

1. 期間 平成元年11月6日(月)～16日(木)
2. 会場 附属図書館会議室(3F)
3. 主な展示資料

第1展示「山とくらし」

I. ツキノワグマと山の生活

指導：大津 高(理学部)

剥製ツキノワグマ・テン等17点、マタギ狩猟装束13点、マタギ狩猟用具、カモシカ毛皮 ほか

II. 山村の冬

ソリ、雪かき、自在鉤、あけびづる細工、ほか
第2展示「山の恵み」

I. “うるし” 指導：横山 昭男(教育学部)

うるし関係古文書・立札、うるしかき鎌、ツツボウ、うるししぼり器、うるし紙製造工程写真 ほか

II. キノコの利用と生産

指導：萩山 絃一(農学部)

キノコ類写真24点 ほか

III. 高山の植物 指導：安部 守(理学部)

山岳空中写真、月山高山植物写真、高山植物さく葉標本30種 ほか

昭和63年度見学者総数

一般成人	個人	650 (人)
	団体	0
大学生	個人	438
	団体	114
児童生徒	個人	9
	団体	30
合 計	個人	1,097
	団体	144
	総数	1,241

山形大学附属博物館 刊 1980. 3. 1発行
編集兼発行人 山形大学附属博物館
(〒990) 山形市小白川町1丁目4-12
☎0236-31-1421 (内) 2921